



「KOMABA DAY」は月に一度実施している日で、世界で起こっている様々な問題に子どもたちが触れる機会を作っています。また、同日は募金箱も設置します。集まった募金は災害などの緊急支援や KOMABA の開校以来、その活動を応援し続けているトータルペインター・ミヤザキ ケンスケさんのプロジェクト OVER THE WALL に役立てられます。なお楽しみながらの活動を目指しているため、「KOMABA DAY」では講師は私服で授業をし、生徒は授業中の飲食を可としています。

五輪の空を舞うドローンの光と影



生中継で響く「キューーン」という高いプロペラ音と、選手の背後すれすれを追うダイナミックな映像——。イタリアで開催中のミラノ・コルティナ冬季オリンピックで、撮影用ドローン「FPV (First Person View)」が大きな注目を集めている。アルペンスキー滑降やスノーボード・ビッグエア、リュージュなど、最高時速 100 キロを超える高速競技において、選手の軌道を至近距離から追尾。臨場感あふれる 4K 映像を世界に届けている。

大会組織委員会によると、従来の固定カメラやヘリコプターでは捉えきれなかった低空かつ流動的なアングルが可能となり、観戦体験の向上につながっているという。雪煙を上げるターンの瞬間や、空中技の一瞬の静止まで克明に映し出す映像は、SNS 上で「まるで現実のビデオゲーム」「スピード感が初めて実感できる」と話題になっている。

FPV ドローンは、もともと操縦者が専用ゴーグルを装着し、機体のカメラ映像を見ながら障害物コースを高速で飛行するレース競技から発展した。急旋回や急降下を繰り返す過酷な環境で培われた機体性能と操縦技術が、スポーツ中継の分野に応用された形だ。大会関係者は「安全確保を最優先に、選手との距離や飛行経路を厳密に管理している」と説明する。

一方で、ドローン技術の拡大には複雑な側面もある。無人機は近年、軍事分野でも広く利用されており、ウクライナ戦争では偵察や攻撃用途で投入されている。華やかな五輪の空を舞う小型機は、スポーツ演出の最前線で活躍しているが、その活用のあり方は社会全体の課題として問われ続けるだろう。



オリンピック選手を撮影するドローン



東京オリンピック開会式でも使われていた

初めてシンガポールでドローンショーを見たとき、私は日本の花火大会の風景を思い浮かべました。夜空をダイナミックに使い、形を自在に変える演出は、人々に新しい感動を与えてくれます。そして、現在開催中の冬季オリンピックでも、ドローンがこれまでにない臨場感あふれる映像を届けています。選手の背後を追う視点は視聴者を一段と楽しませ、スポーツ観戦の在り方を進化させています。一方で、同じ技術が戦場で使われている現実にも目を向ける必要があります。技術そのものに善悪はありませんが、「どう使われるか」を私たちは考え続けなければなりません。かつてダイナマイトを発明したノーベルが、自身の発明が意図せず軍事利用されたことに深く心を痛めた話はあまりに有名です。技術の発展がより良い形で社会に役立つことを願います。(依藤)